

# 國下多美樹「長岡京の歴史考古学研究」

## 目 次

- 序 章 長岡京研究の現状と課題
  - 一 一九世紀末～二〇世紀前半の研究
  - 二 二〇世紀後半以降の研究
  - 三 長岡京研究の諸課題
- 第一章 長岡京遷都と造営の実態
  - 一 長岡京遷都から平安京へ
  - 二 長岡京の立地と造営
- 第二章 長岡宮の構造と独自性
  - 一 大極殿院・朝堂院の構造
  - 二 内裏の構造
  - 三 官衙の構造
  - 四 長岡宮城の復原とその独自性
- 第三章 長岡京の都市計画と宅地利用
  - 一 条坊制と京の基本構造
  - 二 宅地利用と京内離宮
  - 三 長岡京の設計理念
- 第四章 長岡京の土器と食器構成の復原
  - 一 長岡京の土器様相
  - 二 長岡京出土土器の検討
  - 三 古代食器構成の復原
- 第五章 都城の土器供給と消費の実態
  - 一 遷都と土器の供給
  - 二 都城と塵芥一塵芥にみる古代都市の論理一
- 終 章 古代都城における長岡京の史的意義
  - 一 都城の選地
  - 二 宮城の構造と条坊制
  - 三 長岡京の史的意義

本論は、およそ一世紀に及ぶ長岡京の文献研究と戦後の考古学の発掘成果に基づき、主に考古学の視点から長岡京の総合的研究を企図したものである。長岡京に関しての考古学データは膨大かつ多様である。このデータの整理、分析をすすめて、鮮明になっていることと目下の課題を明確にしようと努めた。

まず、長岡京研究の現状と課題を整理した（序章）。そのうえで、長岡宮の宮殿遺構から導かれる特質と建都の目的、あるいは時の政治理念との関係、長岡京城の都市的構造の分析をすすめ、古代都城における史的意義について論じた（第一～三章）。

次に、長岡京跡から出土した土器類の集成と分析を行い、律令的土器様式における位置づけを明確にした上で、土器組成による食器構成の復原、都城の移動に伴う土器移動現象や都城内部における塵芥処理の問題に論を進め文献史料も参照しながら長岡京の都市論を展開した（第四・五章）。

そして、奈良時代後半の後期平城京、後期難波京、平安京と長岡京の形態、立地、構造上の比較研究を行い、古代都城史上の長岡京の歴史的意義を総括した（終章）。

以下、論文要旨をまとめる。

長岡京は、延暦三年（七八四）～延暦十三年までのおよそ十年間、京都南西部の乙訓地域に置かれた古代都城である。長岡京の研究は、一九世紀末の喜田貞吉に始まった。二〇世紀前半まで続けられた前半期の研究は、短命な都であったことへの疑問から遷都と廃都の理由を検討することに終始した。その後、しばらく研究は停滞したが、一九五五年の朝堂院南門の調査成果が研究を飛躍的に進展させる契機となった。二〇世紀後半からの研究は、遺跡から得られた情報を整理し、文献史学の成果を対比しながら歴史像を構築する方法に進んだ。一九八〇年代には、宮殿の構造と条坊制研究、文字資料と軒瓦研究の進展が進み、長岡京像は飛躍的に具体化されることになる。長岡京は、延暦八年前後に造営の画期が求められ、これが桓武朝の周到な遷都戦略によるものと指摘された。古代都城史上の長岡京の重要性を明確にするものと評価された。この一九八〇～九〇年代に構築された長岡京の歴史観は、現在も根強く残るが、考古学的な新成果を踏まえた長岡京像の再構築が望まれる。筆者は、今日までの考古学的成果に基づいてさらなる実像の解明、系統的研究と諸課題の抽出が残されていると評価した。

まず、平城京から長岡京遷都に至る政治過程を振り返る。父、光仁天皇より天智系皇統を引き継いだ桓武天皇は、母系において渡来系氏族を出自とする桓武自身の立場から、新皇統の創始をあらゆる手段を用いて正当化した。大和を離れ山背に新都、長岡京を造営したことがその一大事業といえる。中国の皇帝が行った郊祀を国内で初めて行ったのもそのためであった。特に、都の名称の由来となった「長岡」における宮殿造営の実態を地形と造営という視点から検討すると、長岡宮の特殊性が明確になった。宮殿造営に不向きな地勢に敢えて宮域を置いたのは、手本が長安城にあったからと推定できる。皇統の正当性を示すため、中国思想に強く影響を受けた桓武は理想的な都の建設を貫徹するために、敢え

てこの地を選んだのである。

長岡宮は、大極殿、朝堂院という中心施設を後期難波宮から移建・改造された。大極殿院は規模が拡大され、朝堂院も幅を拡げた。新たに、朝堂院南門を回廊と楼閣を付設し門闕構造とした。門闕は、長安城大明宮含元殿ないし承天門に系譜がつながる建築様式である。桓武が中国皇帝の都に倣って長岡京で導入したものと考えられる。内裏は、遷都の年からおよそ五年間使われた「西宮」と平安京遷都前年の「東院」遷御までのおよそ四年間の「東宮」があった。筆者は、「西宮」の推定地を大極殿西方に求める見解を新たに示し、長岡宮の内裏は遷都当初から完全に独立していたことを明確に示した。宮城の造営は、従来、長岡京前期（延暦三年前後～八年前後）、同後期（延暦八～十三年）の二時期に区分され、後期段階に北方と南方に二町域拡大したとみられてきた。しかし、宮城南方の地層と遺構のあり方や年代観の整理から宮城の拡張がなかったこと、長岡京の造営は段階的に進められたことを示すものとみた。官衙の配置も伝統的な位置を生かしながらも地形の制約を受け北方の低地に配置しているものと考えられた。そして、過去の成果を総合し、宮城のプランを再考した結果、八町四方の方形プランであることが推定されるに至った。なお、宮城北方にある諸施設のうち、官衙的施設は地形に制約された結果、北方に配置されたものと評価した。

長岡京は、「長岡京型条坊制」と呼ばれる条坊が施行されたことが明らかになっている。筆者は、この施行理念は認めつつも、条坊制モデルと検出条坊との位置関係の「ズレ」に疑問をもった。そこで、調査で検出された条坊遺構をすべて集成し、国土座標上の位置関係を統計的に分析した。その結果、長岡京の条坊は、条路・坊路ともに数条単位で触れが異なることが判明し、造営段階の差や施行誤差を反映したものと解釈された。さらに検出条坊遺構に最も適合する新モデルを提示した。

京における宅地利用は、四町～三二分の一町までの宅地班給の実例を確認し、四行八門制の導入の可能性を示した。さらに、京内離宮について見解をまとめた。長岡京では、七つの離宮が知られているが、平城京の庭園、平安京の離宮との対比から所在地が確定していなかった「山桃院」、「嶋院」、「南園」「南院」について新たな推定地を指摘した。さらに、宮城ないし京北方に唐長安城禁苑に対比され推定されてきた「禁苑」は、宮内省園池司との関わる施設と考え、その存在を否定する見解を示した。

以上から、長岡京は、理想的な立地を有する宮城建設を第一の目的とし、新しい都市構造を創出して都市機能を高めることを第二の目的として設計されたと考えた。

さて、長岡京跡からは多様な遺物が出土しているが、年代の特定でき、消費の実態をよく示す資料に土器資料がある。筆者は、まず長岡京出土土器の研究史を踏まえ、種類、形態、技法、法量等の特色を図・写真を併用してまとめ研究者間の共通理解の糧とした。次に、古器名の同定を行って奈良時代～平安時代前期の平城京、長岡京、平安京の三都における食器構成を復原し、階層による使用法の違いを指摘した。年代論に終始しがちな土器

研究に使用者層と食膳方式を再現することを目論んだ。

京城を備える長岡京は、政治、経済、文化の中心地として栄えた古代都市である。宮城は王権の象徴として、条坊と宅地を備える京城は京職によって維持管理された都市民の活動する空間であり、経済的、宗教的諸行為が繰り広げられた。京城の研究課題は、いかに都市としての長岡京の成立と展開を描くかである。

遷都に伴う物資の移動については、木材や瓦、石材など建築資材を取り上げることが多い。そこで、日常の食生活を支えた食器の移動現象を検討した。その結果、長岡京遷都に伴って、旧都・平城京から持ち込まれた食器の存在を認めることができた。次に長岡京の環境を主題とする検討をおこなった。長岡京跡から出土する遺物に明確な廃棄物としての意図をもった塵芥を見出し、塵芥処理の実態研究を行った。律令国家は、都市機能を維持するために、さまざまな施策を行ったことが史料から知られる。集住する都市民の環境悪化に苦悩する律令政府の理想と現実を考察した。

最後に、奈良時代後期～平安時代前期の後期平城京、後期難波京、長岡京、平安京という各都城の形態、規模、立地、構造を比較し、長岡京の都城史における歴史的意義を述べた。

長岡京は、奈良時代の伝統を継承しながら革新的都城を造営しようとした都城であったことが改めて明確になった。顕著な伝統性は、都城の全体形としての縦長プランと宮城北闕型、そして宮城を高所に置くことである。革新性は、唐長安城をモデルに宮城を丘に置くという点である。さらに交通網を一所に集めるために交通至便な土地を選択した点にある。

長岡京の史的意義は、奈良時代における古代律令国家の諸問題を解決するため、天皇権力の集中化と経済性を高める新たな主舞台である都城を建設した点にある。